

保育・小学校教諭を目指す学生の 「聴くこと」に対する意識を高める試み — 後楽園サウンドウォークの実践から —

吉永 早苗[※]

A Trial for Encouraging Consciousness of Listening for Students in
Courses for Nursery and Primary School Teachers:
From a Practice of Sound Walk in KORAKUEN GARDEN

Sanae YOSHINAGA

Sound walk is an activity of sound education, advocated by R. Murray Schafer, in which students walk around a definite place and concentrate on listening to sounds. We had a practice of sound walk with ten students of the nursery and primary school teachers' course for the purpose of encouraging their consciousness of listening and enriching their vocabulary of expressing sounds. In this practice, ten students recorded the sounds they heard in sentences.

Analyzing the students' records, we could distinguish the following two styles of listening: finding existence of various sounds around them, and analytical listening to specific sounds. The latter listening style found the same material makes different sorts of sound; for example, a waterwheel's sound has different rhythms, or the sound of raindrops have a lot of tones. From this analysis, we concluded that the students' consciousness of listening was highly encouraged and their vocabulary of expressing sounds was so widened as to use correct and diverse onomatopoeia, analytical description, sentimental expression and metaphor.

Through the practice, participating students realized the interest of finding, listening and expressing sounds, and after the practice, they said they want to help children realize this interest in their future educational vocation.

Key words : Sound Walk, Nursery and Primary School Teachers' Course, Consciousness of Listening

キーワード：サウンドウォーク，保育・小学校教員養成，聴くことへの意識

※ 本学人間生活学部児童学科

はじめに

子どもの素朴な音への気づきや音楽表現の芽生えとなるような音楽行動に、私たちはどれだけ気づいているだろうか。子どもの遊びのなかでは、必ず何らかの音が鳴っているにもかかわらず、学生の保育観察記録には、その記述はほとんど見られない。また、保育者の環境構成の視点にも、聴覚的な気づきが抜け落ちていることが少なくないだろう。音は四方八方から私たちに届いており、聴覚は、その情報から忠実な写像を得て、常に音空間の全体像を脳内に生成し続けている¹⁾にもかかわらず、今日私たちは、聴覚よりも視覚が優位な生活を送っている。加えて、音の氾濫する中にあって「聴くこと」よりも「聴かないこと」を耳に学ばせている。

保育において、聴覚的な出会いの豊かな音環境をデザインしたり、音楽表現のなかで、子どもが心を揺さぶられたりするような体験をするには、まず、保育者が身のまわりの音に対して、その感受に敏感であることが必要である。本論では、保育者を目指す学生の「聴くこと」に対する意識を高め、音に対する感性を豊かにするための試みとして、サウンドウォークの実践を紹介する。

I 目的

ここで検討するサウンドウォークとは、特定の場所を、音に意識を集中して歩くことである。聴覚を研ぎ澄ませて歩いていると、さまざまな音が見つかってくるだろう。そして、ある場所に佇んで深く耳を研ぎ澄ませると、聴覚だけではなく五感で環境をとらえ、次第に環境の中に溶け込んでいくような感覚になる。サウンドウォークは、マリー・シェーファーの提唱するサウンドスケープ²⁾の理念に基づいた活動の一つで

あるが、音環境を考えたり音を意識的に聴いたりすることを目的に、今日では「音の宝探し」といった企画などのワークショップが全国で開催されることもある。

保育・学校教育においては、保育者養成における学生に対して構内サウンドウォークや音地図の作成の実践を今川³⁾が行っており、表現者としての子どもたちの育ちを支えるために、保育者自身もまた自然環境との交渉が豊かにできなければならないと述べている。また、小学生や中学生を対象とした音地図づくりの試みとして、長谷川⁴⁾が、日常的に聴いている街の音や自然の音を地図に書き込んだり、聴こえてくる音の分類をスケッチシート（横軸＝時間、縦軸＝距離）に記入したりする音整理ゲームを提案している。こうした音地図の発想もまた、シェーファーのサウンドスケープの手法によるものであり、地図に書き表すために、観察者は身のまわりの音を聴くことに意識を集中する。こうした聴き方について藤枝⁵⁾は、聴くことを通じて、自分が周りの環境の中に浸透していくような体験であり、自らも聴いていると同時に、環境も自らを聴いているような相互作用的な意識の交換をもたらすという。

筆者は2011年12月に、学生とともに岡山市の後楽園においてサウンドウォークを行った。実践の基本的な内容は、シェーファーの提案に基づく今川や長谷川の実践と同様である。後楽園の中を歩きながら、途中のある一点に佇み、音を聴くことに親しみ、周りから聴こえてくる音に集中する。そして、音の種類や方向、強さなどを記入したサウンドマップを作成する。

音の事実の記入としてのサウンドマップに加えて、今回の実践では、音の特徴やその音に何を感じたかといった、音に対する主観的な気づきや感想を書き残すことを試みた。そのため、読み返したときにその場

の音の記憶が蘇るような記述であること、他者に音風景が伝わるように音を記述することを参加学生に求めた。そして、音を観察した後でそのメモに基づいて情報を交換し、文章化された音の風景を共有することをおして「聴き方」や「音感受」の多様性を確認した。本論では、こうした体験が、学生の聴くことに対する意識を高めるとともに、将来の保育者あるいは小学校教員として、「音を記述する語法」を豊かにしていくであろうということを検証する。

Ⅱ 方法

(1) 実施場所

実践を行った岡山市の後楽園は、日本三名園の一つである。面積はおよそ13haで、主要構造物としての延養亭のほか、能舞台、池、築山、梅林、茶畑などが配置され、それらは、水路・園路・植込みなどでつながっており、回遊性を特徴としている。他の日本庭園と同様に、さまざまな水の響き、風の音、木々の葉っぱのそよぐ音、小鳥のさえずりを聴くことができる。後楽園はとりわけ水が豊かで、池や滝のほか、「流店」と呼ばれる水の流れを楽しむ場所もある。また、市の中心部に位置するため、庭園の外からは車や工事の音などの街の生活音の聴こえてくる場所もあり、音が多様に存在する。

(2) 手順

2011年12月8日の13時から16時まで、10名の学生と筆者でサウンドウォークとその記録を行った。サウンドウォークには、学生の他にも近隣にある保育園の園長と教員1名が同行した。参加者には、観察場所と時間、「その場を選んだ理由」、「五感の気づき」および、「サウンドマップ」を記録するシートを5枚ずつ配布した。また、サウンドマップを書くにあたっての留意事

項として、以下の内容を紙面で伝えた。

- ◇見えない音を、目に見える図で表現する。
- ◇1分間、じっくり観察して音の様子に慣れる。
- ◇5分を目標にして、聴こえてきた音を図にする。
具体画、抽象画、文字など描きやすい方法で自由に書き込む。音の種類を区別して書いてみる。
- ◇自分のいる位置を基準にして、音の位置に意識を向けて描いてみる。
- ◇移動する音も工夫して描いてみる。
- ◇5分経過したら仕上げる。

観察と記録に慣れるため、まず「水車」の周辺で全員が、手順に従って音を聴き、記録を行った。水車の周辺を選んだのは、水の音をはじめとして音の種類が豊富であるだけでなく、水車の作り出すリズムが一樣ではないからである。それは、水流の変化に因るものではなく、水車の歯車に仕掛けがあって、音に変化が生じるように設計されているのである。リズムの変化に気づいた時点で、その変化を作り出す要因を問いかけた。このようにして観察内容についての情報交換を行い、音観察の気づきのヒントを学生に体験させ、その後13時30分から、各自が思い思いの場所で15時まで観察を続け、最後に検討会を行った。参加学生には、後日、自分が記録した音の特徴や五感の気づきを文章にまとめて提出することを求めた。

(3) 分析方法

観察当日は、午前中にかなりの降雨があったが、午後1時の観察開始時にはちょうど雨があがった。そのため地面は湿り、草木は雨の滴を湛えており、より一層多様な音の感受が期待できそうな天候であった。学生の観察ポイントは15地点であったが、そのうちの11か所が、池や小川・滝などの水の聴こえる場所であった。本論では、参加学生のレポートにおいて、複数者の記録があった地点のなかから、「水車」、

「茶畑」, 「流店」, 「御舟入跡」の4か所の記録と, その他の箇所における特徴的な気づきの記録を抜粋して取り上げる。

それら5種類の記述にあった音を, ①水の音, ②雨の滴の音, ③風や木の葉の音, ④鳥の鳴き声, ⑤人の作りだす音, ⑥その他の音および気づきの6種類に分類し, それぞれの記述の方法を, 「擬音」, 「音の内容や違いの分析(比較)」, 「五感などの感覚」, 「感情」および「比喩」に区別して表に示した(Table 1~5)。このとき, 木や葉の音であっても, 人が働きかけることによって生じた音は⑤(人の作りだす音)に分類した。こうした分析から, 学生がどのように音を聴いたり, 感受したりしているのを読み取っていく。なお, 各地点では, 普通騒音計(リオン社NL-21)での測定を行った。

Ⅲ 結果と考察

(1) 水車のまわり(写真1, 2)

13時5分頃から, 全員で水車の周囲に立って音を聴いた。騒音計での計測値は, 49~50dBであった。筆者の立ち位置でのサウンドマップは, Fig.1のようになった。この場所では, 水車の回るリズムのなかに, 木々の間を通り抜けていく風の音が聴こえる。



写真1 水車



写真2 水車の近くで音を聴く学生

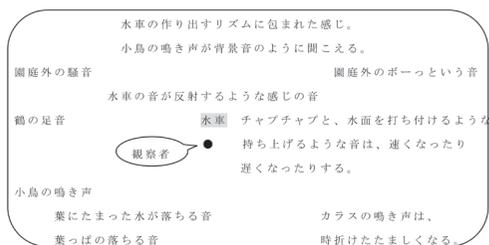


Fig.1 水車を中心としたサウンドマップ

学生のレポートには, 以下のような記述があった。水車が作り出す音だけではなくさまざまな音に気づいている。擬音や比喩を用いて記述をくふうしたり, 感情を重ねたり, 音から想像をふくらませたりしていることも分かる。

①水の音

- 音を聞くだけで水車の回るスピードが変わっていることが分かった。
- 目に見えている距離に比べて, 音は少し遠くで鳴っているような気がした。
- 水車が回るたびに, 「シュボン, ジュボン」と不規則な水の音がした。
- 水車の回る速さには, 一定でなく緩急がある。音が速くなるにつれて, 急かされるようにドキドキ感が増し, 遅くなると落ち着いていく感じがする。雨上がりには, よく耳をすましてみると, 葉から川に水が滴れる音が「ポチャン」とする。水車が絶え間なく発する音の中に, たま

に「ポチャン」という音が重なることで、音楽が流れているように聞こえる。

②雨の滴の音

- 雨の落ちる音は、湿った場所と乾いた場所で異なる。
- 頭の上に落ちた雨だれは見えないし聞こえないけれど、その感触で、ポタンという音の感じがする。
- 水滴の音は、下から跳ね上がるように聞こえる。
- 葉から落ちた水滴が葉に落ちる音は「パタパタパタ」と、子どもが走っているようだ。

③風や木の葉の音

- 風で葉が落ちる音は、落ちたところが葉の上の場合は「パサッパサッ」と軽い感じがして、落ちたところが土の上では「バサッパサッ」と、重くて身が詰まっているような感じがした。
- 風によってモミジが地面に落ちるとき、「ス、…ス」と、とても小さな音がした。
- もみじがヒラヒラと地面に落ちるときの小さな音は、本当に意識をしないと聞こえない音だった。日常にこうした音がたくさん溢れていることに気付かされた。
- 落ちている紅葉を、葉と葉だけをこすり合わせるように足でなぞってみると、貝殻を手の中でゆらしているような「カラカラカラ」という音がした。この音を聞くだけで、音を鳴らしている素材の重さを想像することができた。

④鳥の鳴き声

- カラスの鳴き声は、「クァー クァァー」で、他にも「トゥーイ トゥーイ」、「フィーッ フィーッ」、「トゥイ トゥイ」といった鳴き声が聴こえた。
- いろいろな鳥の声は、上から降ってくるように聞こえた。
- 目を瞑って周りの音を聞いてみると、鳥の声が騒がしいほどによく聞こえ、ジャングルにいるような感覚になった。

⑤人の作りだす音

a. 鼻を吸う音は「ズズー」、足音は「ブサッ」。

⑥その他の音や気づき

- まつぼっくりが落ちるのは、どす黒い感じの音に聞こえた。
- 川の中に紅葉がいっぱい落ちていて、紅葉が星のように見え、キラキラと光りながら流れる水を見て、天の川のように思った。
- 土と雨が混ざり合っているような匂いがした。
- 車の音が、「ズーズー」。
- 雨上がりだったこともあるのか、全体に「スー—————っサ—————っ」という音(空気)を感じた。とても気持ち良かった。
- 目標物を決めて聞くと、その物の音がとりわけ大きく聞こえる気がした。

	擬音	分析	感覚	感情	比喩
①水	c,d	a	b	d	d
②滴	b,d	a	b,c		d
③風・葉	a,c,d	a,c,d	b,c,d		a
④鳥	a		b,c		c
⑤人	a	a			
⑥その他	d,e	f	a,c,e	e	b

Table1 水車のまわりでの音の種類と表記内容

音に意識を向けることで、それまで気づかなかった身のまわりの小さな音にも気づくようになっている。意識できるようになると、水車の回る音の変化にも気づくようになり、擬音を使って表そうとしたり、その原理に好奇心を持ったりするようになる。変化する音とそれをつくりだす要因への気づきは、風や葉っぱ、人が作り出す音の多様さに耳を向けるようになり、比較したり分析したりする聴き方をもたらしめているようだ。音に遠近感を感じる、感情を重ねる、想像力を働かせるなど、文章表現からは音感受の高まりが読み取れる。

(2) 竹林と茶畑に沿った路で (写真3)

東側には竹林と茶畑、西側には、池や岡山城などが見える。広々としていて、風がさまざまな方向から吹いてくる。立つ方向を変えると、聴こえる音が全く変わった。竹林の方を向くと、風の音がよりはっきりする。筆者の立ち位置でのサウンドマップは Fig.2 のように表わされた。音量は、45～54dB であった (14 時の筆者による測定)。2 名の学生 (14 時 10 分～) の音の記録であるが、風の音が主に描かれていた。



写真3 茶畑と竹林に沿った路

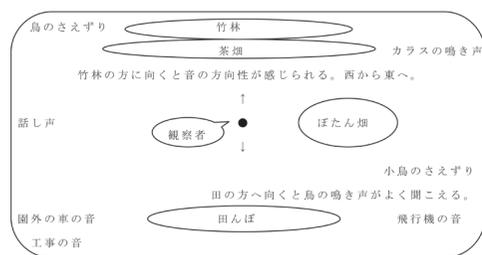


Fig.2 竹林と茶畑に沿った路でのサウンドマップ

③風や木の葉の音

a. 竹が、「サワサワサワサワ……」, 「スー……」, 「サー……」という音を発していた。竹が出す音は、すごく透明感があった。竹は風に吹かれるままであるがままな感じで、とても自然な音だった。

b. 竹林は心地よい音で、ずっと聞いていると心が落ち着いた。一方、車や工事の機械音がこの静けさを邪魔しており、もったくないような気がした。

c. 左耳から聴こえた、風によって竹林が「ササササササササ」と揺れる音は、静かだけど存在感があった。

④鳥の鳴き声

a. 前方から、「千入の森」の方で多くの鳥たちが話をするように絶え間なく鳴いていた。

⑤人の作りだす音

a. 人の足音は、砂のきめの細かさや湿り方によって異なり、靴によっても変わっていた。

b. 後方から、観光客の話す声や「ザ、ザ、ザ」と歩く音が聞こえた。

⑥その他の気づき

a. この場所は近くにあまり植物や建物がなないので、すごく空が開けている感じがした。水車のあたりは、植物などいろいろなものに包まれて、音が反射してくるようなものを感じられたが、この場所では、音が広い範囲を (横も空も筒抜けて) 行き渡っている感じがした。

b. 右耳から、「ビュー、ゴー」と車の走る音や工事をしているような機械音が聞こえてきた。飛行機が全部の音を掻き消してしまうくらい、「ゴー」と低い音が立てながら三度通過した。

c. 前後左右でこんなにも音が違って聞こえることに驚いた。

	擬音	分析	感覚	感情	比喻
③風・葉	a,c	b	a,c	b	
④鳥					a
⑤人	b	a			
⑥その他	b	a,b,c	a,b,c		

Table 2 竹林と茶畑に沿った路での音の種類と記述方法

- る。その段差は、10センチぐらいで緩やかなスロープ状になっている。小さな石を乗り越える水は、「コポコポッ」と聴こえる。これらの音は、緩やか水の流れのなかで、しっかりと耳を澄ませると際立って聴こえてくる。
- c. 流店には、建物に水が入って出ていく。水が入っていく個所（A地点）では、ジョボジョボジョボ、「コポコポコポ」、「ジョロジョロジョロ」、「ザーザー」と、濁った大きな音だった。逆に水が流店から出ていく個所（B地点）では、「チロチロチロ」、「チョロチョロチョロチョロ」と、可愛らしくてか弱く、混じり気のないようなとても小さな音だった。この違いは、水が流れ落ちる段差がA地点とB地点では、全然違ったからではないだろうかと思った。また、水の流れる幅が、A地点では急に狭くなっているのに対して、B地点では広い。水の流れる速さや勢いを変えられることで、音の違いが生じていたのかなと思った。また、建物の中にいたらA地点の音がよく聴こえるのに、建物の屋根のところから一步出ると、A地点の音がほとんど聞こえなくなった。建物の屋根がドームのような役割をして、音を反響させていたからなのかなと思った。
- d. 水路の高い段差は、「ジャラー」という高い音と、「ゴボゴボ」と低い音が混ざって聞こえた。水路の低い段差は、「ピチャ」、「ポク」と高い音がして、あぶくがたっていた。
- e. 水が落ちる音には、「ポコポコ」と「シャー」の二種類がある。低い方の「ポコポコ」という音は遠くまで聞こえるため、流店では「ポコポコ」という低い音がベース音になっている。高低差がある方では、全体を「シャー」が覆っている。
- f. 水の流れに変化を出すために高低差をつけて、高い段差は直角にして、大きく低い水の音が出るようにし、低い段差は緩やかな傾きをつけて、静かでより高い音が聞こえるようにしていた。
- g. 屋根の下では大きな段差の水の音がよく聞こえ、屋根の外では静かな水の音が聞こえて不思議だった。このような点も計算されて作られた場所なのと思った。
- i. 「ジャー」、「ポトポコ」、「タララララ」、「トロロロロ」、「グログロ」、「ボコボコ」、「ピンッ」などが聴こえた。高低差が少ない方では、「ピロ ピロロ」、「カン カラ」「ポン」という音。

④鳥の鳴き声

- a. カラスの音がよく響いていた。

⑤人の作りだす音

- a. 踏み石の上を歩くと「スースー」としており、砂の上とはまた違った軽い音がした。
- b. 流店の川は浅いので、セグロセキレイという鳥がよく飛んできた。水の中を歩く時は、音をほとんどたてないように繊細に歩く。しかし、人が近づくと、水の中を歩く時とは違い、「バサー」と大きな音をたてて飛んでいく。

	擬音	分析	感覚	感情	比喻
①水	a,b,c, d,e,i	a,b,c,d, e,f,g,i	b,c,d,e	d,g	c
④鳥			a		
⑤人	a, b	a, b			

Table 3 流店での音の種類と記述方法

水の流れる音を楽しむ為に作られた休憩所であるだけに、学生の気づきも水の音の変化に集中している。観察が非常に細やかになっていることや分析的な聴き方をしていることが、音の違いについての丁寧な描写や、その変化を作りだす要因への言及から窺える。擬音の使い方も、多様になっている。このような音感受の経験は、水の音を、聴覚

的なできごととして保育の音環境に取り入れるアイデアにつながるだろう。

(4) 御舟入跡 (写真 6)

竹林と茶畑に沿った路と同様、そこには水の佇まいはない。また、開かれた環境ではなく、樹齢の長い樹木に囲まれた空間は木立のホールのように、銀杏の落ち葉の絨毯と太陽の光が、眩しいほどの黄色い世界をつくりだしていた。雨上がりなので、歩くたびに、落ち葉が足に吸いつくような感じであった。小鳥の声には遠近感が聴こえた。音量は46～48dB(14時40分頃)で、園内で最も静かな空間であった。14時10分の3名の学生の記述である。



写真 6 御舟入跡

学生のレポートには、他の場所に比べて視覚的な記述が多くあった。「御舟あとに通じる小路は、木の葉が低く近いところに茂っており、寒く、薄暗かった。何か近づいてきそうな雰囲気だった。御舟入跡の開けたところに銀杏があった。これまで薄暗く茶色と青緑だったところに突然日が差し、落ち葉の黄色が、なおさら輝いているように思えた」と書かれてあるように、薄暗い所から明るい空間に出た光の変化が、感覚を大いに刺激したのであろう。

②雨の滴の音

a. 風と葉の音のなかで、「ポト、ポトポト、

パチッ」と水滴が落ちる音がした。

③風や木の葉の音

- 周りには高い木が多く、風が吹くと葉の揺れる音が降ってくるようだった。
- 静かな場所だったので、風の音や葉っぱの落ちる音がよく聴こえた。風の「サー」という音の後に、葉が「カラ、カサ」と落ちる音。
- 自然の奏でる音を、一番体感できた場所であったと思う。

④鳥の鳴き声

- 風と葉の音のなかで、「チュンチュン、ピヨピヨ」と鳥の鳴く音がした。

⑤人の音

- きめの細かい土だった。歩くと、「シャツシャツ」と音がする。アイスやシャーベットをよく尖ったスプーンで引っかいたような感覚の音に聴こえた。落ち葉の上を歩くと葉が、「カサカサ」擦れる。濡れた土の上とは違って、紙のように乾いた音だった。
- 自分の足音は「フシュフシュ」といっていた。遠くから人の歩く音も聴こえてきたが、「クシャクシャ」という音だった。
- 足元は石畳で、靴に付いた砂利と石がジャリジャリ擦れていた。
- 大きなイチヨウの木を叩いてみたが、叩く場所によって音が異なっていた。外側の皮のようなところは軽くて「スカスカ」していて「コンコン」という音がしたが、内側に近いところは硬くて「カチカチ」という音がした。また、木の根に近い下の方が、音が響いていたような気がした。雨で湿っていたところと乾燥したところがあったが、乾燥している部分の方が、音が響いていた。木に生えたキノコを触ってみたが、音はしなかった。

⑥その他の音や気づき

- 電車や車の音がよく聴こえてきた。木に囲まれている分、電車や車の音が不自然に思えた。

	擬音	分析	感覚	感情	比喻
②雨の滴	a				
③風・葉	b		b,c		a
④鳥	a				
⑤人	a,b,c,d	a,b,d			a
⑥その他				a	

Table 4 御舟入跡での音の種類と記述方法

他の場所に比べて、ここでは叩いたり触ったりして、学生が自ら環境に働きかけて音を作り出そうとしている。銀杏の枯れ葉の上を歩くたびに音が聴こえ、それが囲まれた環境のなかで響き、自分の耳によく届いたからであろうと思われる。

(5) その他の場所での気づきから

「よく聴く」ことによって、学生の記述は分析の様相を帯びてくる。また、自分と環境との関係性を記述したり、想像を巡らせて記述したりしている内容から、聴いた音を文章化することを楽しんでいるようにも読み取れた。たとえば以下のような内容である。

①水の音

- a. 鯉が餌を食べる時に、水がはねて「ジャボジャボ、ポチャポチャ、ドボン」と、大きな音がした。我先にと餌を求める鯉の気持ち、音になって表れているようだった。
- b. 池の水が風の影響でなびいているのを見て、視覚的に見ると「サワサワサワ」というように聞こえて軽い感じだったが、整備の人が池のなかで歩く音を聞くと、重く聞こえた。視覚的に感じた時は、浅いと思ったのだが、音を聞いて、思っていたよりも池が深そうだと感じた。
- c. 滝は、上から下に流れているが、下から上に沸いてくる感覚もあり、まっすぐ流れ落ちているが、横に広がったり縮まっ

たりしている感覚もあった。

②雨の滴の音

- a. 三つ並んでいる大きな石に、葉から雨の滴が落ちて跳ねる。水の跳ね方は落ちるたびに違うので、「タタン」や「タタタターン」など、1回ごとに違うリズムを聴くことができる。
- b. 風が吹くと水滴が落ちてくる。水滴は、葉の上に落ちると「パリッ」と弾かれる。濡れた地面に落ちると「ペチャっ」と馴染んでいく。
- c. 同じ滴が葉に当たっているのに、葉を滑り落ちてくる度に違う音のように聞こえた。滴が落ちる葉の位置が高い方が、音は高く聞こえた。

③風や木の葉の音

- a. 乾燥した葉が落ちるときは、「パリパリ」、「ピラピラ」のように聴こえる。水を含んだ葉が落ちるときは、「しとっ」、「べとっ」と聞こえる。また、木の柵の上や大きな石に落ちるときは、「パリパリ」、「ピラ」、「パリ」といった音だった。湿った草の上に落ちるときには無音であり、素材同士の組み合わせによって出る音が違ってることがわかった。目を閉じていても、音の質から、その音を発する素材を想像できるなど思った。

④鳥の鳴き声

- a. カラスの鳴き声は、遠くでは「カーカー」と聴こえていたのに、木々にカラスが入ると「クアークアー」と聴こえるようになる。
- b. 鳥の鳴き声がよく聴こえる場所では、常に鳴いているように感じていたが、よく聴いていると、1羽が鳴きだすと他の鳥達も返事をするように鳴き始めていた。尖っているような、丸いような鳴き声があった。

⑤人の作りだす音

- a. 同じ土の上を歩いていても、右足と左足

なり高度な音感受である。擬音語の多彩さや音の分析からも、それまでのステレオタイプの音の聴き方から脱していることが読み取れる。そして、カタカナとひらがなで表現し分けているが、そこに音質のニュアンスの違いが感じられる。

IV 全体考察

サウンドウォークのねらいは、次の二つであった。

①聴くことへの意識を高める。

②音を伝える語法を豊かにする。

今回の実践のなかで、学生は、音を文章化することのために、身のまわりの音をよく聴こうとした。明らかに、聴くことへの意識は高まっている。そして、聴くことに意識を向けることは聴き方を変化させているが、それは、量と質のそれぞれをとらえる聴き方であるだろう。量とは、身のまわりにある多くの音に気づくことであり、質とは、特定の音に対する集中した聴き方であり、音の特徴を分析したり環境に働きかけて音の変化を聴いたりするなど、積極的な聴き方である。

こうした聴き方によって、学生の音感受は豊かで多様になり、それを文章化するためにさまざまなくふうを凝らすようになったのであろう。そのくふうとは、前項で挙げた観察記録に見られる、分析的な記述、音を正確に表そうとした擬音、感情や比喩表現などであり、音を伝える語法が豊かになっていることがわかる。そうした変化について、学生自身も実践を終えての感想に、「光が照ると、地面や空気が乾燥して、音が高く明るくなったような気がした。雨の方が、雨音や地面を歩くときの音など、いろいろな音が聞こえてきて賑やかだった。晴れているときの方が、生き物の鳴き声がよく聞こえてきて、元気で明るい印象を受ける。雨が降っているときの方が、雨の滴

がいろいろなものを動かしてくれるので、音はたくさん聞こえるのではないかと思うが、自分の中には、雨＝静、晴れ＝動のイメージがある。動のイメージは、命のあるものの動きや音から生まれるのかもしれない」と表現している。音の聴こえ方を雨や光との関係でとらえ、その多様性と、なぜそう聴こえるのかについての自己分析的な記述が見て取れる。

学生は、じっくり耳を澄ませることによって、さまざまな音を感受し、それを、自分の言葉をくふうして文章化することを試みた。雨あがりに出会ったことも音探しには幸運であったかもしれないが、音を聴くことの楽しさを実感できたことが何よりの収穫であっただろう。たとえば、「私たちはふだんの生活で、目に頼りすぎているなど思った。今回、耳に集中することで、耳で楽しむことの楽しさ、目をつむって、音から“これは何の音かな？”と想像することの楽しさを味わえた。子どもたちにも、“耳で楽しむことってこんなに面白いんだ”と感じてほしいと思った」と感想を述べている。学生たちがこの実践で用いた擬音は多様であり、その表現の豊かさからも、音の擬音化を楽しんでいることが窺える。擬音はステレオタイプではなく非常に音に忠実なものであったが、忠実に書こうとすることが音の識別につながり、聴くことへの意識を高めたと考えられる。

実践に参加した学生の全員が、後楽園を訪れたのは初めてではない。幼い頃から遠足や行楽などで、何度も散策している学生もいた。しかしなぜ、今回初めてこれだけ多くの音に出会い、音を深く聴くことができたのか。実践の目的である「文章化すること」はもちろんであるが、グループでの観察とファシリテーターの存在が重要な要因であるといえる。最初の観察地点では全員で音を聴くことによって、自分が気づか

なかった音の存在に耳を向けることができるようになっていたであろう。そして、「水車」が作り出すリズムの不規則性から分析的な聴き方を学習し、その後の観察と表現に応用していくことができた。今回サウンドウォークを経験した学生が、保育者あるいは小学校教員として子どもたちと観察に出かけた際には、今回の知識をいかし、彼女たち自身がファシリテーターとして子どもたちを導くことができるだろう。

おわりに

岡山の後楽園は、水の音を楽しむように造られていると思う。竹林を過ぎて、筆者が水の音の聴こえる方向を辿って歩いた先には、滝（花交の滝）があった。滝に副う小路には石が敷かれてあって、凹凸が足の裏から伝わってきた。凹凸があるときは足元に意識が向いていたが、視界が開けてすべての感覚がぱっと滝壺の音の方に向けられるのを感じた場所では、地面の凹凸も途切れていた。それは、音と、水や植物や土の匂い、足元の触感、視野の広がりや採光といったあらゆる感覚を統合して楽しめる仕掛けの感じられる瞬間であった。

この滝の音は轟音であったが、それは芭蕉の「閑さや岩にしみ入蟬の声」と同じように、逆に沈黙を感じさせるように思われた。そして、滝壺の方は低い音がするが、拡がっていく水は高く聴こえた。せせらぎは高い音がするので、音の勢いや水深と、音の高低の關係に気づかされた。また、少し場所を変えるだけで、葉っぱのそよぐ音が聴こえたり聴こえなかったりするの、滝壺のそばにある大樹の仕業であった。滝壺側では 65～67dB の音が響いていたが、樹の後ろ側の騒音値は 56～57dB であった。樹木が、音を吸収することも計算されて設計されているのだろうか。花葉の池の方にある滝では、多様な音を作り出せるよ

うに、滝の下に石を置き方で、音の高さを変えたり音色を変えたりしている。このように、水だけでなく、小路の石も樹木もすべてが、庭園を訪れる人の五感をどのように刺激するのかを考慮して設計されていることを、サウンドウォークをとおして実感することができた。

佐野⁶⁾は、聴覚が共感覚性を強くおびていることについて、「聴覚世界は視覚・言語などの高次の知覚・知能とみなされている世界と、味覚・触覚・嗅覚・運動感覚などの低次の知覚・知能とみなされている世界の中心に位置している。眼は限定され自立した働きをもっているが、耳は実は耳のみでなく全身で聴かれるという特性をもち、この非限定性、非自立性が他の低次とみなされている感覚への通路をつくるのである。耳は、皮膚感覚（鼓膜は皮である）、体性感覚の延長上にあるとあってよいし、魚の鰓の塞栓の進歩したものである」と解説している。「耳で楽しむことってこんなに面白い」と、学生が子どもに伝えたい気持ちになったのは、この共感覚性に気づいたということなのかもしれない。

本実践における学生の学びは、「一つひとつの音を丁寧に聞くことは、その時間を大切にすることだと感じた」という感想に端的に現れているだろう。サウンドウォークでとらえた音を文章化する体験は、「音感受力」や「音を表現する語法」を身につけるとともに、丁寧に音を聴くことが、「今、ここ」にある自己の存在の実感につながるということが分かった。

引用文献

- 1) 大橋力・中村桂子：音は身体全体で感じている, 生命誌ジャーナル, 2006 夏号.
- 2) R. Murray Schafer は、カナダの作曲家であり音楽教育の著作も多い。サウンドスケープの概念の提唱者であり、「聴

- くこと」の重要性を現代人に促した。
- 3) 今川恭子：環境を通じた表現教育の試み—子どもたちの姿から保育者養成へ，音楽教育ジャーナル，4-2（2007）.
 - 4) 長谷川有機子：心の耳を育てる—音からの教育「イヤゲーム」—音楽之友社 1998.
 - 5) 藤枝守：響きの生態系—ディープリスニングのために—，フィルムアート社，2000 pp.8-9.
 - 6) 佐野清彦：音の原風景—日本から世界へ— 雄山閣，1996， p.15.

今回のサウンドウォークに参加してくれた本学児童学科の稲垣さん，工藤さん，福島さん，藤井さん，松藤さん，宮井さん，三輪さん，安井さんは2012年4月から保育士・幼稚園教諭，久保さんは小学校教諭として，大森さんは2013年4月から幼稚園教諭として勤務される予定です。彼女たちの貴重な音の記録によって，本論文を書くことができました。ここに心より感謝申し上げます。

なお本研究は，文部科学省科研費研究（基盤C）「音楽教育から展開する保幼小連携—分化と深化のプログラム」（課題番号22531042）の一環である。